



農都共生研究会
Agricultural laboratory

地域の資本を活かして、日本をもっと元気に、北海道をもっと明るくすることを目的としています。全国各地の地域づくりの成功例を調査し、農村と都市の共に繁栄するあり方を研究しています。さらに農村と都市の共生と交流の促進を提言し、各地の地域振興の具体的な組織と連携し、各種事業を実践します。

■活動内容
研究会は次の活動を行う。

- ① 多様な活動主体の取組活発化に向けた活動
- ② 地域住民への普及・啓発に向けた活動
- ③ 農村と都市の共生と交流推進方策の検討
- ④ 農都共生に関わるビジネスプランの検討
- ⑤ その他研究会の目的を達成するために必要な活動

2012年度 活動報告

- 6月11日 **イマイカツミ農園のプチ援農**
研究会メンバー4名が、昨年に引き続き富良野在住の半農半画家イマイカツミさんの農園を訪ね、薪割などのお手伝い。
- 7月2日 **由仁町「まるほり野菜園」プチ援農**
6月に新規就農したばかりの「まるほり野菜園」。研究会メンバー6名にてハウスの支柱立てや、草むしりのお手伝い。
- 7月8日～ **さっぽろ圏ご当地ふード発見隊**
(主催:札幌広域圏組合)
札幌圏内の小学生21名と保護者で構成された「さっぽろ圏ご当地ふード発見隊」。さっぽろ圏の農業生産者を巡り、地産地消を学び、地元食材によるオリジナルラップサンドを作成するプロジェクトに農都共生研究会メンバーも実地見学等協力。
- 8月25日 **農都共生研究会特別フォーラム「売れる仕掛け」**
元東武百貨店バイヤー内田勝規氏による、北海道物産展、台湾、中国における北海道農産物に対するニーズ等の講演の後、町村農場の町村代表にもご参加いただき、内田氏と首都圏での販売についての課題をテーマにディスカッション。店頭に来るお客様から、顔が見える通販へ繋げていくための方策、ネット通販の仕掛けづくり。同業者のホームページの検証など多岐にわたるフォーラムを林会長のコーディネートにより開催。
- 8月27～30日 **慶應義塾大学大学院SDM研究科 アグリゼミ十勝視察**
- 10月6～21日 **イマイカツミ絵画展&トークショー**
10月6日より21日まで、札幌駅プラニスホールにて開催。期間中3,300名余の来場者を記録。
- 11月7日～ **6次産業人材育成講座**
- 2013年 3月 **報告書発行**

Pick up 6次産業人材育成講座

市民団体である農都共生研究会は札幌市の平成24年度「6次産業人材育成講座」の運営を委託。2012年11月7日から22日まで、30名の受講者に対しワークショップを含む14回の講座研修と、2日間4か所の視察研修を実施。

「6次産業化への取組みの推進に資する人材を育成すること」が目的の講座において、当研究会としては、単なる6次産業化の説明のみならず、6次産業化を実践している当研究会メンバーの鶴雅グループ代表大西氏、町村農場代表町村氏などを講師として招聘。企業における6次産業化の課題と具体的な方法論を講座にて示唆をいただき、受講者全員が多視点で議論する場を提供した。

大西氏からの「地域資源を付加価値として観光に結びつけることは、地域の連携はもとより地域の人材との繋がりが、自然と歴史の研究も重要である」という提言は、「共通の方法論を学び、多視点で議論を行うこと」を実践する慶應SDMアグリゼミとも方向性が一致する。

8月に開催された特別フォーラムにおいて、元東武百貨店のバイヤーである内田勝規さんの講演における「販売をするためにどこまで徹底的に話し合われてきたのか。商品を開発するうえでの深い思いを理解し、それを販売へ繋げるためには売っている人の研究も大切である」という言葉は6次産業化であれ、農商工連携であれ重要である。

5年目の農都共生研究会。さらに農村と都市の共生、地域振興の具体的な提言を目指す。



6次産業実地研修先：余湖農園(左)、町村農場

AGRILAB REPORT



農都共生ラボ活動報告書 • 2012 - 2013



「フードバレーと勝ち」視察

慶應SDMの「アグリゼミ」

農都共生ラボ・アグリゼミ学生レポート『Next leader from AGRILAB』
農都共生研究会



System Design and Management

<http://www.sdm.keio.ac.jp>

■お問い合わせ
慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科
[日吉学生部SDM担当]
〒223-8526 横浜市港北区日吉4-1-1 協生館2階
TEL 045-564-2518 FAX 045-562-3502
E-mail sdm@info.keio.ac.jp

■2013年3月発行
発行/慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科
農都共生研究会
企画・制作/東海林商事株式会社【農都共生研究会事務局】
〒060-0051 札幌市中央区南1条東1丁目2-1 太平洋興発ビル
TEL・FAX 011-592-2786 E-mail shoji@s-co.jp





「農都共生ラボ」多分野を横断的に活動

SDMには、専任教員研究室型ラボのほかに、さまざまな分野の教員が横断的に活動をする横断研究型ラボがありますが、「農都共生ラボ」は、横断研究型ラボの一つとして、2008年の開学と同時にスタートしました。

農都共生は、「農村と都市の共生」の略語で、人材の循環、経済の循環、情報の循環による多層的共生を目指しています。農村と都市をトータルに考え、地域活性化を実現するための重要な概念です。「農都共生ラボ」は、農林中央金庫の寄付講座として活動していますが、農業・農村を大きなシステムとして捉え、「農都共生」による地域活性化に関する研究・普及活動に取り組み、毎年、「農都共生ラボ」報告書も発行しています。林美香子特任教授ほか前野隆司教授、白坂成功准教授などが参加しています。

学生たちの活動を中心に紹介しましょう。

農都共生による地域活性化に関する研究

林特任教授は、札幌を拠点にキャスターとして活動しているため、日吉キャンパス協生館でのゼミは月1〜2回しかできませんが、その分密度の濃いゼミを行っています。ゼミの参加者は実に多様です。いろいろな学部出身の新卒学生や多様な業種・職種の社会人学生に加え、SDM研究所研究員も参加し、活発な議論・研究を行っています。

ラボでは、協生館でのゼミ活動の他、農業・農村視察などのフィールドワークに力を入れています。今年度は、埼玉県で自然農法を実践する須賀農園、千葉県柏市で人気の農産物直売所「かしわで」、北海道十勝地方の農業関連施設の視察を実施しました。



須賀農園にて畑の視察中

ゼミに参加している学生の研究テーマは、「CSA(Community Supported Agriculture・

地域が支える農業)」「バイオマスエネルギー」「植物工場」「耕作放棄地」「自然栽培(無肥料・無農薬による農法)」「農業ビジネス」「都市農業」など多岐にわたっています。「CSA」の研究においては、地域活性学会で優秀論文に選ばれるなどの成果もあがっています。

ラボでは、複雑な農業問題や地域活性の課題を「農都共生」の視点で、局所解ではなく全体最適解を求めていくSDMの特徴的な手法を駆使して研究しています。例えば、「自然栽培」という新しい農法と、耕作放棄地問題、中高年失業者対策を組み合わせた実践的な研究を行い、新たなビジネスモデルを提案した学生もいます。また、自然栽培を研究するため、慶應日吉キャンパス内に自然栽培農園を開墾し、実際に野菜などを育てながら実験も行っています。



ゼミの様子

農業・農村での調査研究

毎年夏には、農業・農村の視察研修旅行をしていますが、2008年から3年間は北海道視察で農業体験や聞き取り調査を行い、論文や報告書にまとめました。昨年は東北視察を行い、山形県最上町で開催した町民とのワークショップで、「若者を鍛えるツアー」を提案し、半年後にツアーが実現するという成果もありました。

今年度は、北海道帯広市役所からの招きにより、十勝地方の視察を実施しました。調査テーマや視察先の選定、首都圏での事前調査など、さまざまな準備を重ね、空路、帯広入りをしました。(詳細は3〜5ページ参照)

「農都共生」や「地域活性」に興味のあるみなさん、ぜひ、SDMの農都共生ラボの活動にご参加ください。

農都共生ラボ担当教員



前野隆司 Takashi MAENO

慶應義塾大学大学院SDM研究科
委員長・教授

「農業は次世代システムデザイン最先端事例のひとつ」

キャノン(株)、カリフォルニア大学バークレー校Visiting Industrial Fellow、ハーバード大学客員教授、慶應義塾大学理工学部教授を経て現職。

- 研究テーマ/システムデザイン理論・方法論、人間社会システムデザイン、技術システムデザインなど
- 著書/『思考脳力のつくり方』『脳はなぜ「心」を作ったのか』『錯覚する脳』ほか



白坂成功 Seiko SHIRASAKA

慶應義塾大学大学院SDM研究科
准教授

「創造的・系統的に農業の進化をデザイン」

東京大学大学院航空宇宙工学修了。三菱電機(株)にて「このとり」、「みちびき」等の開発に従事後、現職。慶應義塾大学大学院SDM研究科にて博士(システムエンジニアリング学)を取得。

- 研究テーマ/技術・社会システムのイノベティブデザイン方法論、戦略的標準化など



林美香子 Mikako HAYASHI

慶應義塾大学大学院SDM研究科
特任教授/農都共生研究会会長

「持続可能な農業・農村のために、農都共生の推進を」

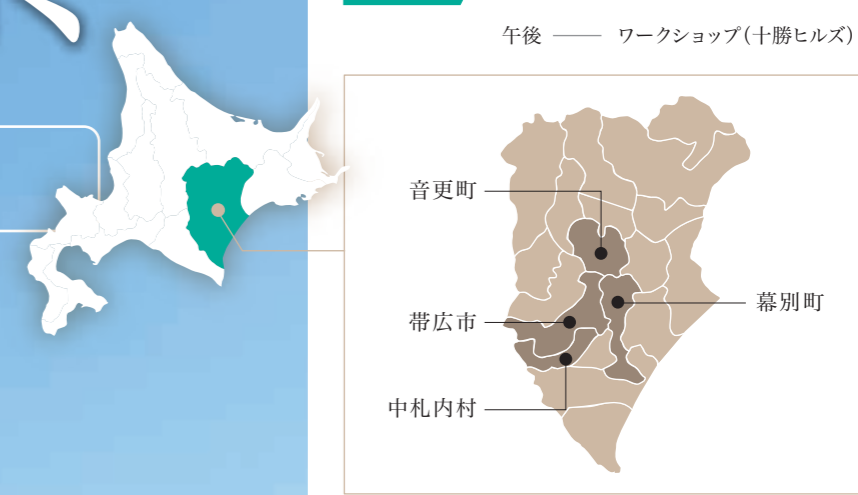
北海道大学農学部卒業。札幌テレビ放送株式会社アナウンサーを経て、キャスターとして独立。北海道大学大学院にて、博士(工学)を取得。慶應義塾大学大学院SDM研究科特任教授。北海道大学大学院農学研究院客員教授。札幌在住。

- 研究テーマ/持続可能な農業、農村と都市の共生による地域再生、食と農による地域づくりなど
- 著書/『農都共生のヒント』『農村へ出かけよう』ほか

農都共生ラボ・アグリゼミ

十勝視察

3泊4日



8月27日	午前	帯広市役所
	昼食	十勝農園
	午後	JA帯広かわにし 川西発電所
	8月28日	午前
	昼食	十勝ヒルズ
	午後	山本忠信商店 麦音
8月29日	午前	ノラワークスジャパン
	昼食	中札内村美術館
	午後	JA中札内
8月30日	午前	ワークショップ(十勝ヒルズ)
	午後	ワークショップ(十勝ヒルズ)

TOKACHI

今年度は、8月27日から3泊4日の日程で、林特任教授・白坂准教授と院生8名が、北海道十勝地方で視察を実施。帯広市の招きにより、食と農林水産業を柱とした地域産業政策である「フードバレーとかち」をテーマにした視察でしたが、事前調査として、首都圏のデパートや食品会社への聞き取り調査、消費者への十勝に関する意識調査など、準備を重ねました。聞き取り調査は初めてという学生も多く、調査項目の抽出、調査方法の選定など、試行錯誤の連続でしたが、学生にとって貴重な体験になりました。

現地では、十勝の農場や農業関連施設、地域づくりを視察し、農業者・食品加工業者・流通関係者などと意見交換。学生たちは、自然栽培に挑戦している大規模経営農家や、長いもの輸出に成果をあげている農協、新たに製粉に挑戦する食品卸会社の取り組みなどについて、活発に聞き取り調査を行いました。

また、最終日には、首都圏での調査結果を発表した後、「十勝と消費者を結ぶ」をテーマに、地元住民と共にワークショップを開催し、活発な議論が続きました。その後の報告会では、十勝を売り込むため、「関東圏に姉妹直売所を作り、販売する」というユニークなPR策などを、米沢帯広市長や一般参加者に向けて提案しました。視察やワークショップの様子は、地元新聞やテレビで報道されるなど、大きな注目も集めました。学生たちは今回の視察報告書をまとめ、帯広市に提出しましたが、帯広市からの評価も高く、来年度も十勝視察を実施する予定です。





1日目 8月27日(月)

■帯広市役所

フードバレーとかちへ。
帯広市長を表敬訪問。

初日、まず初めに訪れたのは帯広市役所。フードバレーとかちを牽引する米沢則寿帯広市長にご挨拶をしました。十勝の第一印象など和やかに談笑した後、4日間の視察へ臨む学生たちへ激励の言葉をいただきました。



■十勝農園 農園という名の地産地消レストラン

十勝の野菜に囲まれた、
幸せランチタイム。

素材の美味しさを生かしたメニューがズラリと並ぶ贅沢ビュッフェスタイル。あれもこれもと迷いながら、十勝産素材を堪能しました。

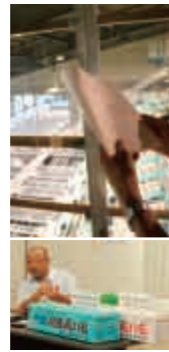


■JA帯広かわにし

世界に誇る、
ブランド長いも

国内最大規模の
長いも洗浄選別施設を見学。

収穫されコンテナに貯蔵された長いもが、洗浄、選別、箱詰めされるまで一連の流れを間近で見ることができました。その他、国内では規格外となる品の、レシピ提案を含めた海外市場への輸出戦略などをお聞きしました。



■交流会

地元青年「本気塾」
との交流

平均年齢20代の十勝若手農家集団「本気塾」のメンバーと次世代の農業について意見を交換。



2日目 8月28日(火)



■折笠農園 木村式自然栽培農法を実践

常に消費者の目線に立つ、生産者の熱い思い。

幕別町で木村式自然栽培農法を実践されている折笠健さん。無肥料無農薬をウリにする生産者本意の栽培でなく、本当に安心でおいしい品種を適正価格で継続的に供給できるよう努力する必要があると、自然栽培農法に情熱を注ぐ生産者としての想いをお聞きしました。いつも消費者の目線に立つ真摯な姿勢が、安心と美味しさの原点です。



■十勝ヒルズ 十勝平野を臨むガーデン

絶好のロケーションでいただく、
絶品メニュー。

丘の上に咲き誇る季節の花たち。美しいガーデンを眺めながらいただく十勝産素材はまた、格別でした。



■山本忠信商店 十勝小麦・小麦粉連合

コミュニケーション産業としての農業を。

2011年7月、十勝初のロール式製粉工場を完成させた山本忠信商店。ここでは、工場見学とともに山本英明社長のお話から、小麦の流通の変革によって生産者と消費者をつなぐコミュニケーション産業としての農業実践を学びました。



■麦音 地域に愛され続ける老舗パン屋さん

焼きたての十勝小麦パン。地産地消の体現を学ぶ。

小麦畑に水車に風車。麦音は、小麦がパンになるストーリーを目の前に感じながら、焼きたての味を楽しめるベーカリーテーマパークです。「パンを通じた十勝産小麦の価値最大化」に挑む杉山雅則社長の熱い想いと取り組みをお聞きしました。ピザ作り体験では、それぞれ個性あふれるトッピングで楽しく地産地消を学びました。



■交流会

地元の地産地消支援者との交流

地域活性化を推進する、「十勝千年の森」代表の林克彦さん、「フードソムリエ」の北村貴さん他、地元のみなさんと十勝の食材で交流会を開催。



3日目 8月29日(水)

■ノラワークスジャパン

冬の北海道に
マンゴーが実る

地域を元気に。
北国のマンゴーに込められた想い。

期間中唯一北海道らしい涼しさが感じられたこの日ですが、ハウス内は南国のような暖かさに保たれています。十勝の気候やエネルギーに支えられて実るマンゴーに、中川裕之社長の熱い想いを感じました。



■中札内村美術館 広大な森に点在する美術館

地産地消を超えた、地球産地球消を。



ここでは、北海道を代表する製菓店六花亭の社長であり、慶応大学の大先輩でもある小田豊さんが学生たちを迎えてくださいました。地域産業や人材育成に対する考え方などの貴重なアドバイスに、学生たちは夢中で聞き入っていました。



■JA中札内 豊富な加工品で中札内枝豆をPR

地域特産品のブランド化を学ぶ。

豊富な加工品の開発でブランドを発信しながら、全国32道府県の学校給食で提供されるほど素材そのものの安心の美味しさを大切にしているJA中札内村。隣接する工場では、その秘密である瞬間冷凍の技術を見学しました。



4日目 8月30日(木)



【午前】ワークショップ

アイデア飛び交う
ブレインストーミング。

「フードバレーと消費者をつなぐ」をテーマに、3班に分かれて行われたブレインストーミング。学生たちから次々と湧き出る斬新な切り口と、企業や行政の方からいただく地元ならではの情報が飛び交う、活発なワークショップとなりました。

【午後】フードバレーとかちへの全体討議

発表！
十勝と食への新たな提言。

3班それぞれ模造紙いっぱい広げたアイデアを発表しました。中には「十勝十品ファーマーズBBQ」など、「体験」がキーワードとなるような、視察の実感がこめられた提言がみられ、帯広市長からも「新鮮で新たな気づきがあった」とご好評をいただきました。



十勝毎日新聞▶
2012年9月2日付



▼SDMニュース 2012年9月号



農家の友 2012年11月号▶



今回の十勝視察では、視察先の皆様を始め、下記の皆様から多くのご協力を頂きました。日本航空札幌支店長の藤田克己さん、六花亭の小田豊さん、十勝ヒルズのみなさん、帯広市長の米沢則寿さん、帯広市役所のみなさん、誠にありがとうございました。

日本の農業に
役立てたい

修士課程2年

櫻井 崇仁

Takahito SAKURAI



アグリゼミでは北海道帯広市とのプロジェクトに参加しました。様々な企業の方へインタビューに行く機会をいただき、実践経験の中で一番知見が広がったプロジェクトだったと思います。ここで出会った人達とアグリゼミの皆様の支えにより、私は今年農業ビジネスで起業することにもなりました。本当にありがとうございます。ここで得たことは大変貴重です。今後SDMとアグリゼミで学んだことを日本農業の役に立てていきたいです。

■修論研究

「農家」と「消費者」のニーズを満たす情報システムのデザイン

海外での活躍も
視野に

修士課程2年

市川 愛

Megumi ICHIKAWA



アグリゼミで様々な農業について学びつつ、研究でも生産者と消費者を直接結びつける農業モデルについて研究をしてきました。

卒業後は食品関係の会社に進むため、今後これら知識を無駄にすることなく、木を見て森も見ながら会社に貢献していきたいと思っています。

また、在学中にフランスへ5ヶ月間の交換留学も行ったので、会社でも海外で活躍することを目標に働いてまいります。

■修論研究

アメリカとフランスに学ぶ日本の地域支援型農業の提案 —経済・安全・幸福の視点から—

地域の問題解決に
貢献したい

修士課程2年

鈴木 重央

Shigeo SUZUKI



SDMにおける2年間で、アグリゼミでの活動を含みいくつかの地域を見てきました。共通しているのは、いずれの地域も想像以上に地域内のコミュニケーションがとれていないことです。よそ者の我々学生が地域社会に入り込み、行動するだけでも地域の中を繋ぐ機能がある程度発揮することが出来ます。今後はより詳細な調査、情報の提供や可視化という技術を通してまた違った価値を地域に提供し、問題解決に貢献したいです。

■修論研究

津波被災沿岸地域の住宅復興政策のデザイン

修士課程1年



星野 雄介

Yusuke HOSHINO

アグリゼミは農業という枠に捉われず食を考えている印象で、私は食を支えるための新しい農業のあり方を学びたいと思っています。人は食べないと生きていけません。しかし、農業を取り巻く環境はTPP、遺伝子組み換え、風評被害といった問題を抱えています。現状の農業に問題意識を持って、先進的な取組みをされている人との出会いがアグリゼミの最大の魅力だと思います。人が如何に食べるのかを考え、全体最適な農業のあり方を考えてまいります。

修士課程1年



島田 亜依

Ai SHIMADA

私の研究分野はアートですが、複数のゼミに自由参加できるとい SDM の利点を生かし、アグリゼミにも参加しています。先生方や先輩が丁寧に教えてくださいるので、農業に少しでも関心があれば、積極的に学べる環境です。多岐に渡る専門分野の方が所属しており、自身の研究分野では得られない活動や新しい知見が得られるゼミでもあります。昨年度の十勝視察での成果を土台として、今年度は地元特産物のブランディング等の実践的な活動ができればと考えています。

修士課程1年



杉山 のぞみ

Nozomi SUGIYAMA

アグリゼミは、とても和気あいあとした雰囲気で行われています。その為、先輩との距離も近く、入学したの頃からアグリゼミの内容以外のことに関してもたくさん教えていただきました。また、今年度は、夏に十勝に視察へ行きました。出発前には、物産展へ消費者インタビューを行うなど、勉強になることが多かったです。普段では絶対お視察での成果を土台として、今年度は地元特産物のブランディング等の実践的な活動ができればと考えています。

修士課程1年



茂山 愛保

Manaho SHIGIYAMA

アグリゼミでは、食という視点で自分の日常を再発見することが出来ました。特に、十勝視察で出会った方々はみなさん、日本の胃袋を担っているという誇りを真剣に語って下さり、私の日常の食を選択する場面において、大きな意識変化をもたらして下さいました。

これからのアグリゼミでは、消費者が、生産者のみなさんとどう繋がっていくことがお互いの利益を生むのかを、考えていきたいです。

修士課程1年



中本 亜紀

Aki NAKAMOTO

豊かな「食」「住」の実現を考える活動をする中で、気付くと自分自身も豊かになっている。アグリゼミは、そうした貴重な経験ができる場だと思います。農都共生の推進に向け、ゼミでの議論はアートやスポーツにまで及びます。フィールドワークでは多くの気付きを得、また自分の生き方等までを広く深く考える機会となります。アグリゼミでの思考と実践を修士研究のベースとし、今後幅広く自分の活動に繋げて行ければと思います。

現場の声を
意識していきたい

修士課程2年

堀田 佳江

Yoshie HOTTA



私の修士論文は、商店街になじみのない育児中のお母様方に、商店街を歩いてもらうことで、魅力を発見してもらうワークショップの企画・提案をしました。現場での調査を意識したのは、M1の時からアグリゼミでの経験です。たくさんの視察に参加させてもらい、生産者のこだわりや愛着を肌で感じる事ができました。

今後は、常に現場の声を意識できる社会人になれるように努力していきたいと思っています。

■修論研究

商店街でのコミュニケーションが創出している価値の分析

博士課程



今野 浩子

Hiroko KONNO

アグリゼミに関わる事ができて一番良かったことは、人と人とのつながりにより沢山の方々と情報交換ができたことです。「アグリ」というキーワードで集まってこれた方々とコミュニケーションをとることができ、今まで知らなかった分野のことや興味のあったことなどについて、多視点から情報を得られました。本来の研究分野とは違っても、いろんな事に関わって観たり触ったりふれあうことにより、考え方や発想がとてもひろがりました。

研究員



松尾 康弘

Yasuhiro MATSUO

SDMでは大規模複雑な社会システムをどのようにデザインし、マネジメントするかを学び、それをアグリゼミで農業という社会システムに適用することで、自身の研究テーマである「都会での農業」についての一定の解を得る事が出来ました。修了後は、それを実践し検証するために「アーバンファームファクトリー」という会社を起業しました。実際現場を見て聞いて議論し、実践してフィードバックを得られるアグリゼミは貴重な研究・実学の場合です。

研究員



村瀬 博昭

Hiroaki MURASE

研究テーマである農業の経営手法のCSA (Community Supported Agriculture) は、安定収入が得られる仕組みのほか、人の信頼関係を構築し、地域社会の問題を解消できると考えています。社会で収入の安定を保つのが難しくなっている昨今、消費者が地域で支え合うことで経済と同等以上の価値を生み出す取り組みが活発になっており、CSAによって実現しようとする動きも出てきています。今後は住民の拠り所となるCSAの実践方法も追究していきたいと考えております。

研究員



本山 憲誠

Kenshi MOTOYAMA

農業と肥料を使用しない「自然栽培」による耕作放棄地解消と新規就農支援を研究テーマとしてアグリゼミに参加しています。一昨年より、日吉キャンパスに自然栽培の実験農地を開墾し、ゼミ生と共に汗を流しています。さらに、研究テーマを実業化し、千葉県木更津市において野菜の生産を開始しました。アグリゼミは毎年のように起業家を生み出しているゼミであることも大きな特徴です。

私は農業や農村に関わる様々なテーマの調査研究に取り組んでいます。アグリゼミには2010年度から参加していますが、多様なバックグラウンドを持つゼミ参加者と意見交換をすると、農業や農村に対する新たな視点に気付かされる事が多々あります。毎年夏に行われる農村視察は、農村で働き暮らしている方々との交流を通じて、都会の学生の方々が農業や農村について興味関心を持ち、理解を深める貴重な機会となっているように感じます。

農林中金総合研究所 研究員



一瀬 裕一郎

Yuichiro ICHINOSE

視察から
地域の宝を実感

修士課程2年

森 崇

Takashi MORI



一番印象に残っているのは、山形県最上町での視察、ワークショップにて提案された「若者を鍛えるツアー」に参加したことです。

これらを通して、地域の宝は当たり前の中にあり気づきににくいこと、違う立場の人から意見をいただくこと、長期的な視点をもって企画を立てることの重要性、の三つを実感しました。これらは、地域振興全般に関係する知見であると考えています。この知見を活かして、社会に貢献していきたい、と考えています。

■修論研究

インホイールモータを搭載した超小型電気自動車の操縦安定性向上のための制御システム設計

2012年度 アグリゼミメンバーによる
論文・講演論文並びに寄稿

【論文・講演論文】

■本山憲誠・保井俊之・高野研一・前野隆司
「自然栽培による新規就農支援システム設計と就農者満足の上向き効果の検証」
生活経済学会第28回研究大会報告要旨集 2012年6月

■早田吉伸・前野隆司・白坂成功・保井俊之
「国内外事例分析に基づく日本型フューチャーセンターのデザイン：地域課題解決のための協働プラットフォームの実現を目指して」
地域活性化研究 2012年Vol.3, pp.85-94

■坂倉倉介・白坂成功・保井俊之・前野隆司
「共同行為における自己実現の段階モデル」による『地域の居場所』の来場者の行動分析：東京都港区「芝の家」を事例に」
地域活性化研究 2012年12月(受理)

【寄稿】

■林美香子
◎「農都共生が相互理解を深める」
「クリエイティブ・コミュニティ・デザイン 関わり、つくり、巻き込もう」(フィルムアート社刊)2012年5月
◎「農都共生研究会の活動」 「農家の友」2012年8月
◎「新時代を拓く 慶應SDMの挑戦～農都共生ラボの活動」
「サンケイビジネスアイ」2012年11月
◎「強い『農』つくれ」 読売新聞2012年12月

地域活性ラボ

SDMでは、2012年度、地域活性化の研究を行う地域活性ラボを、設立した。
農都共生ラボの前野教授、白坂准教授、林特任教授、村瀬研究員も参加。全国の地域活性化の事例研究と分析、地域活性学を構築するための研究等を行う。まちづくり、農村振興、観光、コミュニティ、文化などのテーマをSDMの視点から研究し、農都共生ラボと連携した活動も予定されている。

また、地域活性学会とも連携を図り、共催で部会を開催し、事務局運営を地域活性ラボで行うことになっている。地域活性学会の中に新設されたメソドロロジー研究部会の設立メンバーとして、前野教授、林特任教授も参加している。地域には様々な活性化のケースが存在し、これまで数多くの事例発表がおこなわれてきたが、これらの事例に共通するメソドロロジーの研究は進んでいない。
この研究部会では、全国各地の地域活性化の研究を通して、共通する成功要因の抽出と体系化を試みる。こうして得られたメソドロロジーを活用することで、地域固有の資源を生

かし、地域活性化をより効果的に進めることが可能となる。第1回研究会は、日吉・協生館において行われたが、九州、四国、関西などからの参加者も多く、全国的な関心の高まりを感じた。農都共生をテーマとした研究も進めていきたいと考えている。

